

午後四時となり、手術着に着替へ、擔架に乗せられ、いざ手術室へ移動せられる。目前に手術室の看板見えし時、突然擔架急停止す。何事ぞと思ひたるに、看護師「大變、足指にマニキュアあり」と叫ぶ。吾は緊急入院にて、事前手続き等通常行程免除せられたり。手術の場合、指先にて体内酸素計るため、手、足すべてのマニキュア取り除くこと必須なる事知らず。除光液使ひ、看護師および親戚等數人が吾の足指を拭きて、吾思わず苦笑ひし、「すみませぬ」と謝る。

いよいよ手術臺に移せらる。覺えずして全身温まる心地す。消化器外科部長「赤谷さん麻酔かけますよ」と吾を覗く。我が見ゆるは眞上のみ。聲をかけられたる瞬間意識遠のく。「赤谷さん目を開けて下さい。最短の手術でしたよ」との外科醫の聲にて目を覺ます。さすが名醫の執刀、一時間丁度にて五十グラムの膽嚢を摘出したる事、立ち會ひし従妹二人より聞く。お腹には五個の穴のみあり。しかしながら、膽嚢は切除せられ、へそより摘出せられし故、お腹の中二カ所は「縫つてあり」と知らざる。

翌日教授回診あり、「どうですか？」と質問せられ、痛み痛みは残れども快適なりと返答。若き外科醫三名、入れ替はりに立ち寄り、傷口のあんばい、體調のあれこれ質問す。また、「今日より病院の廊下、十回ばかりは歩くべし」と何度も指示されき。歩めば振動傷に響き痛みあり、また横向きに横たはれば内臓の傷に激痛走り、仰向けに寝ぬる事以外能わず。身體振ることと、負荷をかくるは爲らざるときつく指示さる。従ひて重き荷物など持つを禁ぜられる。火曜日の手術後は点滴のみにて絶食。飲み物すら口にすべからずとの指示。退院豫定の土曜日に、待ちわびし食事採る事こと許可せらる。

土曜日の検査結果、白血球數かなり高く、抗生劑の点滴繼續せねばならずとの醫師の判断にて、退院は月曜日に延期せらる。膽嚢の炎症強しきことの結果と覺ゆ。

退院せし後、二週間後の外來診察にて、擔當醫より組織検査の結果癌等の心配なき事説明あり。従ひて、内臓によほどの痛みなくば、病院に通ふの要無しと、言はる。これにて解放せられ、ひと月は大人しくしたるものの、氣功、ピラティス體幹強化・深層筋トレ、ゴルフ等の運動再開するを楽しみに養生すと決める。

（平成二十八年十一月七日受附）